

R 3 湯田小学校校内研修

日置市立湯田小学校

1 研究主題

子ども一人一人が輝く教育活動を目指して
～ 表現力を高める授業の工夫を通して ～

2 主題設定の理由

(1) 資質・能力ベース（3つの柱）

令和2年度から全面実施されている学習指導要領では、これからの社会を切り拓き生き抜くための必要な力である資質・能力について、教育課程全体を通して育成することを基本的な考え方としている。

また、育成すべき資質・能力を明確化し、以下のように、3本の柱に整理し具現化している。

【資質・能力を育成する3つの柱】

- ① 「知識・技能」 知識及び技能が習得されるようにすること
- ② 「思考力・判断力・表現力」 思考力、判断力、表現力等を育成すること
- ③ 「学びに向かう力・人間性等」 学びに向かう力、人間性等を涵養すること

具体的には、第1に「何を理解しているか、何ができるようになるか」という視点から、生きて働く「知識・技能」の習得が挙げられている。第2に「理解していること・できることをどう思うか」という視点から、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成が挙げられている。第3に「どのように社会・世界とかわかり、よりよい人生を送るか」という視点から、学びを人生や社会に活かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養が挙げられている。

学習指導要領は、教科等の目標や内容が、これらの資質・能力の3つの柱で整理されているところに大きな特徴がある。教科等の指導計画の作成、各単元及び一単位時間の授業づくりの工夫を進めるにあたっては、資質・能力の3つの柱で教育課程全体が貫かれていることを意識し、それらがバランスよく育成されるように配慮することが求められる。

(2) 資質・能力を育成する「主体的・対話的で深い学び」

資質・能力の育成のために学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことの重要性から、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。

「主体的・対話的で深い学び」とは、新学習指導要領で求められる「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの資質・能力を育成するための大切な学びである。

この学びでは、実社会や実生活とかわかりがあるリアリティのある学びに主体的に取り組んだり、多様な他者との対話を通じて考えを広めたり深めたりする学びを実現することが大切になる。

また、単に知識を獲得するだけにとどまらず、身につけた資質・能力が様々な問題の対応に活かせることを実感できるよう、学びの深まりの実現をめざすことも重要となる。

こうした「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、ねらいをもって学習課程を工夫する授業づくりが必要であり、そのために「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点に立った授業改善が求められている。

各教科においては、言語活動、観察実験、問題解決学習等を効果的に取り入れることを主眼とすることや、各教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」を働かせることが重要になることなどが、留意事項として示されている。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」実現のポイント

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、教師が一方的に教え込む暗記・再生型の授業から、児童自ら考え他者に伝え合う思考・発信型の授業に転換していかなければならない。

しかし、これまでとは違う新しい教育活動を推進しなければならないという訳ではない。本校においても、これまでの研究成果をこれからの研究に活かすとともに、地に足をつけ土台を強固にした研究推進を実行していくことが重要であると考えている。

以下に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたポイントを、これまでの研究で確認してきた視点を包含して、3つの学びごとに整理して示す。

【3つの学び】

① 「主体的な学び」

児童自らが学びをコントロールできるようになることをねらう。問題場面を自分事として捉え、自分の力で解決し、その過程と成果を自覚させる。これを繰り返すことで、児童は、自分自身の力で学びをコントロールできるようになる。そのためには、1単位時間の授業づくりについては、導入における「つかむ過程」と「見通す過程」、終末における「振り返る過程」に意識を向けることが大切である。

② 「対話的な学び」

他者との学び合いを重視することが大切にする学びである。問題解決場面においては、自分一人ではなく、多くの人で協働し解決に向かって取り組んでいくことが必要である。そのためには、1単位時間の授業づくりについては、「考え合う過程」で、他者と力を合わせて問題解決を行ったり新たな考えを広げ深めたりすることが大切である。

③ 「深い学び」

身につけた知識や技能を活用して関連づけることが大切になる学びである。明確な問題意識をもった主体的で文脈的な学びにより知識や技能のつながりを確認することが必要であり、知識や技能を対話によりつなぐことで再構成するという処理場面の活性化なども重要となる。

また、学習活動を振り返り、収集した情報や既有知識を関連させ、自分の考えとして整理し意味づけたり、それを共有したりすることも大切になる。

このように、「主体的な学び」と「対話的な学び」は、「深い学び」に大きく関与している。本校の研究においても、今後も、それぞれの学びを意識していくと同時に、「深い学び」の実現に向かうよう、ねらいを明確にもち授業づくりを行う研究を行っていく。また、前述したように、これまでの研究を活かしながら、今年度も、指導方法をあり方についての実践研究を行っていくことを確認したい。

(4) 研究の経過と児童の実態から

本校では、令和元年度より鹿児島県教育委員会の指定を受け、「キャリア教育」の研究を行ってきた。平成30年度の全国学力・学習状況調査において、算数A算数Bともに全国比を大きく下回っており、特に算数Bにおける数学的な考え方は著しく低い状況であった。解答を見ると、まず無答率が高いことが目立っていた。

そこで、実際の研究では、算数科を中心として「相互コミュニケーション」「あきらめない力」「気づきから学ぶ」「自主性」といった人間関係形成・社会形成能力をはぐくむための授業づくり、授業終盤の10分を有効活用しての（ラスト10分の充実）の基礎的・基本的学力の向上に取り組んだ。

その結果、新しい問題に取り組む時、友達と力を合わせてよりよい解決策を考えようとしたり、これまでの知識や方法を生かして解決していこうとしたりするなど、問題に取り組む姿勢に変化が見られるようになった。

また、このような取組の成果として、各学力検査等で具体的な数値としてその成果が出てきている。具体的には、NRT（標準学力）検査では、全学年・教科総合の知能偏差値は、令和元年度は49.3であったが、令和2年度は50.2に上昇した。

さらに、アンダーアチーバーの割合も、11.9%から9.0%に減少した。

また、県学習定着度調査でも、令和元年度は、県平均比-7.3であったが、令和2年度は+1.8となり、県平均を上回ることができた。

これらのことから、これまでの算数科研究を通して、児童の伸びや定着が高まる成果を得たことを確認できた一方、算数科以外でも、更に表現力の育成をめざした授業改善が必要になってくるという課題が浮き彫りとなった。

そこで、教育活動全体の中で児童自らの考えを表出させる場を意図的に設けたり、スキルを身につけさせたりして、表現力の向上をめざすことが急務であることが確認された。

以上のことから、今年度は、全ての教科を通して、自らの考えを確かに表現できる児童の育成をめざして取り組んでいくこととする。そのために、算数科研究で培ったこれまでの財産である（「1発表話型と聞き方・話し方名人を活用した授業」、「2気づく、つながる、生かすを意識した指導過程の工夫」、3「ラスト10分の充実による基礎基本の定着」等）を活かして継続して取り組んでいく。

また、表現力をはぐくむ手立てとして、ICTの効果的な活用、さらには、地域・家庭と連携も行っていくことで、さらに表現力の幅をもたせ、児童の学力の伸長を図ることにつながると考えている。

表現力の向上については、育成すべき資質・能力の柱の一つとして、「思考力・判断力・表現力等」が挙げられており、思考力、判断力、表現力は、切り離してはどれも育たないかわりのある能力である。これらの力が、互いに補完しあう関係にあることを念頭に置いて研究を推進していく。

3 研究主題「自らの考えを確かに表現できる」について

(1) 「表現力」についての本校の捉え

自分の考えをもち、筋道を立てて表現し、互いの考えを伝え合うことができる。

- (2) 教科における「自分の考えを確かに表現できる」についての本校の捉え
参考として、国語科と算数科の例をあげてみたい。

【国語科】

- ・ 文章を読んで理解したことなどに基づいて自分の考えを形成したり、話の内容が明確になるように構成を考えることを通して自分の考えを形成したりするとともに、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して自らの考えを正確に整理したり、適切に表現したりすることができる。

【算数科】

- ・ 事実を確認し、既習事項を基に構想を立てて、数学的な表現を用いて問題を解決できるとともに、根拠を明らかにし筋道を立てて、互いに自分の考えを分かりやすく伝え合い自らの学びを評価できる。

- (3) 研究主題にかかわる事項（下線部は、関係する部分）

① 「思考力・判断力・表現力」に関する事項

【国語科】

考える力や感じたり想像したりする力を養うこと、日常生活における人とのかかわりの中で伝え合う力を高め自分の思いや考えをもつことなどができるようにする。

＜新学習指導要領解説 国語編より＞

【算数科】

日常の事象を数理的に捉え見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見だし統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。

＜新学習指導要領解説 算数編より＞

② 「表現力」に関する事項

【国語科】

人間と人間の関係の中で、互いの立ち場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めること。

＜新学習指導要領解説 国語編より＞

【算数科】

根拠を明らかにし筋道を立てて体系的に考えることや、言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを適切に用いて問題を解決したり、自分の考えを分かりやすく説明したり、互いに自分の考えを表現して伝え合ったりすること。

＜新学習指導要領解説 算数編より＞

4 研究の目標

各教科の授業において、解決に向かうプロセスの中で、児童が表現する（問題に対して自分の考えをもち、筋道を立てて表現し、互いの考えを伝え合う）場面を効果的に取り入れた授業づくりを行うことで、児童自らの考えを表現できる指導方法のあり方を明らかにする。

5 研究の仮説

次のような手立てをとれば、児童の表現力の育成につながるであろう。

- ア 児童の表現力を伸ばすための授業改善
 - ・ I C Tの活用、ユニバーサルデザインの活用
- イ 基礎的・基本的な知識・技能を定着させるための時間や表現力を高める問題に取り組むための時間の効果的な運用
- ウ 家庭・地域との効果的な連携

6 研究の内容と方法

表現力を伸ばすための授業改善

(1) 授業実践

- ア 1時間の全体を見通し、効果的な言語活動を設定したり、「気付く」「つながる」「生かす」を視点として指導過程の工夫を行う。

「気付く」

自力解決の場面では、自分の力で解決しようとする気持ちを育て、解決に向かう自分のよさに気付かせる。

「つながる」

ペア・グループ・全体での話し合いの場面では、お互いが自分の意見を伝え合い、よりよい考えを見つけさせる。

「生かす」

授業を振り返る場面では、次時の学習に生かせるようにするとともに、学習内容の定着を図るようにする。

イ I C Tを効果的に活用し、自分の考えや思いを表現できるようにする。

ウ 授業研究会を実施したり授業を見合う機会を設けたりして、開かれた空間を位置づけ、全員が積極的に授業研究に関わっていく体制づくりを行う。

エ アンケート（児童・教師）の実施と分析を行い、授業改善に活かす。

(2) ラスト10分の効果的な活用

ア 授業のラスト10分を設定し、授業の土台となる基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図るための問題と補充的な指導、B問題を意識した記述テストを行うための問題の選定を行うとともに、確実に見届ける。

イ 算数科については、適用問題を解かせ、確かな定着を見届ける。

ウ 国語科については、漢字、音読、言葉の意味が定着できているか確認する。

(3) 地域・家庭との連携

ア 家庭との連携を図りながら、家庭学習（家勉：学習する内容を自分で考える）
・学習習慣・生活習慣の充実を図る。

イ 地域マイスター等地域の人材を積極的に活用し、その教科に対する興味・関心を高める手立てとする。

7 めざす児童像

自分の考えをもち、筋道を立てて表現し、互いの考えを伝え合う児童

低学年：自分の考えをもち、進んで伝え合う児童

中学年：友達と考えを比べ、認め合う児童

高学年：友達との考えを比較検討し、高め合う児童

8 研究の組織

